氏名	谷原　佐智
ヨミガナ	タニハラ　サチ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博美第700号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	（論文）「音／エロス —音と体と心が共鳴し合うユートピア的時間—」 （作品）「未来の求愛の歌 —あなたのためだけの触覚的時空間—」
論文等審査委員	
（主査）	東京藝術大学　教授　（美術学部）　古川　聖
（論文第１副査）	東京藝術大学　名誉教授　（美術学部）　伊藤　俊治
（作品第１副査）	東京藝術大学　教授　（美術学部）　八谷　和彦
（副査）	東京藝術大学　教授　（美術学部）　鈴木　理策

（論文内容の要旨）

本研究の目的は、肌で聴く音の触覚性、聴者と音源間の空間性に焦点を当てることで、官能的な音の共鳴メカニズムの解明を試み、「音にエロスは存在する」ことを論証することである。身体性のある親密な触覚的空間音響、官能的な音を共鳴させる触覚的演奏表現の追究により、聴覚を超えて心身全体でエロスを感じる共鳴時空間として開かれた音楽の可能性を提示する。また、身体論の哲学、美学、舞踊学、科学など領域横断的に関われる音楽論を目指す。

視覚芸術や文学においてエロスは主要テーマとなり数多く創作されてきた。しかし、音のエロスに関しては、ワーグナーやスクリャービンなどの作曲家が音の官能性を追求したにもかかわらず、視覚芸術ほどには発展していない現状である。要因として、演奏者・指揮者など他者の身体と楽器を通して作曲家の音を伝えるために直接的な身体性が音楽から遠くなったことや、ワーグナーの『タンホイザー』には３Dの官能的音響の萌芽が見出せるが、大部分の官能的な音楽は空間性と触覚性が殆どないために全身でエロスを体感できないこと、また音のエロスがどう展開してきたか音楽史として体系的に充分研究されておらず、演奏者がその音を十分に解釈し表現していない場合があるために、聴者がエロスを感受できないことが挙げられる。この問題提起を出発点とし、演奏する身体と舞踊する身体を再統合させて触覚的演奏を探究すると音のエロス表現が飛躍的に進展し、「肌で聴くエロスの共鳴時空間」を実現させると音のエロスを全身で体感できるのではないかと考えた。

方法として、はじめに生物史を遡って音のエロスの起源を探り、ヒトを含む多様な生物から架空の生物までの求愛行動と誘惑する声を考察することで、音にはフェロモンのように他者を誘引・誘導する作用があり、求愛の声が音のエロスの原型である可能性を提示している。次に、楽曲の主題やメロディー・ハーモニー・リズムなどの要素に発現するエロスの様相を分析すると、二者の心身が共鳴し合う性愛の時間が音楽構造のプロトタイプであり、この「官能の音楽のメカニズム」は恋愛の最中に作られた音楽において顕著になるという現象を明らかにした。特に、上方倍音列にある属七の和音の鏡像として下方倍音列に現れる導七の和音は、現代のラブソングや愛の映画音楽まで恋慕の象徴として継承され、音のエロスの鍵であることを詳述する。

音のエロスを全身で感受するには、「官能の音楽のメカニズム」を踏まえて親密な触覚的音空間を再構築する必要がある。よって、演奏という行為を、奏者と楽器の身体がエロティックな関係で共に行う触覚

反応による身体奏法として新たに捉え直し、更に、奏でる身体に踊る身体のエロティシズムを導入して「エロス演奏方法論」を立案する。演奏者を介さない場合は、空間音響のテクノロジーで音の動きを擬人化し、誘惑する仮想の奏者の身体に舞踊の動きを与え、聴者にアプローチして愛撫する触覚的な音など、求愛するヒトの動きをした身体性のある音を実現すると聴者にエロスの共鳴が起こると考え、触覚的な空間音響作品『未来の求愛の歌 ―あなたのためだけの触覚的時空間―』を創作した。また、視覚が届かない背後の空間は聴覚と触覚の世界であることに着眼し、聴者の後方空間における音の動きを開拓することで、従来のコンサートにはない音空間のエロス化を試みている。

このように、聴者と「愛人化した音」の２人きりの親密な空間で音のエロスの存在感を全身で感じられるよう作品創作を通して実験を重ね、芸術としての裸体画やヌード写真に相当する「音の裸体」を空間音響で表現する可能性を探り、「音にエロスは存在する」ことを立証する。

（論文審査結果の要旨）

本論文は視覚美術や文学思想のジャンルでは多面的に論議されてきた「エロス／エロティシズム」の概念を、音の領域において探求しようとする意欲的な論考である。
空間を伝わる振動により耳や皮膚で感じる音の触覚性に着目しながら官能的な共鳴のメカニズムを探り、音のエロスの存在を実証することが本論の目的となる。
音のエロスとは視覚のエロスとは異なり、立体的であり、空間的であり、触覚的であり、直接的であることが本論の中心課題だが、このことは「視覚的なエロスの20世紀」から「聴覚的なエロスの21世紀」への移行を暗示しているように思える。
″目のエロス″から″耳のエロス″へのこのような転換は、メディア論的にも、かつてマーシャル・マクルーハンやヴァルター・ベンヤミンが指摘したことであり、本論はその移行のプロセスを、’’音の裸体″というキーワードやパルス/リズムの問題として実践的に証明しようとしている。
初期段階では散漫だったテーマの絞り込みや構成、章立て、結部の曖昧さも次第に整理され、事前審査会で指摘された不整合な箇所も改善され、まとまりのある論考になっている。
闇の中での包括的な振動体験を重視したサラウンド・スピーカーによる博士作品「未来の求愛の歌-あなたのためだけの触覚的空間-」と本論の関連も十分な説得力を持ち、今後の展開を期待させるものになっていた。
踊りや運動を伴うエロス演奏方法論や作曲家の内的動機等の音楽論を核としつつ、ルートヴィッヒ・クラーゲス『宇宙生成的エロス』やジョルジュ・バタイユ『エロティシズム』を援用しながら、哲学や美学、身体論や舞踏学を横断し、先行研究の少ない音のエロスの問題に果敢に取り組んだ姿勢を評価したい。以上の理由から博士号に値すると判断した。

（作品審査結果の要旨）

本作品は谷原の研究論文「音/エロス ―音と体と心が共鳴し合うユートピア的時間―」に基づき、音によるエロスの表現を目指し、作曲技法、空間音響による音像移動、合成音声や録音された環境音などを複合的に組み合わせたマルチチャンネル音響作品である。観客は周囲8箇所に円形に配置された8台のスピーカーの中心に座り、照明の消えた環境の中で、9分ほどの音響作品を体験することとなる。
本作品はソフトウェアとしては音像を移動させ、没入感のある音像空間をつくれるミキサーソフトであるIRCAM Spat Revolution, MAX MSP、ハードウェアとしてはコンピュータとオーディオインターフェース、それにつながる8台のスピーカで構成されている。
これらを駆使し、谷原はあたかも複数のセイレーンに囲まれ、セイレーンが移動しながら鑑賞者にささや

きかけながら移動していくような空間を作り上げた。

作品の内容として具体的手法としては、音声合成による性と年齢を越えた誘惑するセイレーンのイメージ、導七の和音によるハーモニーの構成など作曲手法による官能の表現、歌い手であるセイレーンの音像移動による身体的な音の表現、ただひとりの聴衆に限定したパーソナルな音響空間の構成と背面からの音像の積極的な利用などを組み合わせてあり、音空間自体の身体化を目指している。また、本作品の終盤では徳島県日和佐の大浜海岸でのフィールドレコーディングによる海の音や風の音も用いており、作品に複雑さを加えている。

音楽は情動と密接に結びついており、愛やエロスなどをテーマやモチーフにした曲も古今東西多数あるが、メロディや歌詞、歌唱法など既存のやり方ではなく、「音の空間自体を人工的にエロス化する」ことに挑戦し、今まで取られていない手法を積極的に組み合わせて独自性のある作品を作り上げたことを評価し、実際に作品を体験した主査、副査の協議の結果、博士作品にふさわしいと判断した。

（総合審査結果の要旨）

論文において谷原佐智は音楽という、人間の文化とエロスに関して広範な調査を行い、多方面からの考察を行った。音楽とエロスの関係については、断片的に論じられることはしばしばあったが、これまでに体系的、実証的、総合的に論じられたものはほぼみあたらないと言える。谷原は生殖本能という生物としての根本目的と多くの生物に見られる求愛の歌を関係づけ、それをエロスと音楽の関係の出発点とした。文化としての人間の音楽を作曲家の創作の側面から多数の実例を分析し、導７の和音をエロス表現を関係付ける仮説を提出した。これに関してはさらなる検証が必要だが、大変重要でユニークな指摘だと考えられる。谷原はさらに、演奏行為の身体性を考察、そして人間という聴者による音楽認知、感受にまで論を広げ、空間もふくめた総体性から音楽とエロスを論じた。論文は多くの例証を示しながら進められるが、結論として「未来の音とエロティシズム」と題して、最新のテクノロジーと音とエロスが交錯する次元において、４つの未来の音楽のイメージとして提示された。

作品は視覚的な表現を捨象した、暗闇のなかで演奏される8チャンネルの空間音響作品で、そこでは音の動きを擬人化し、性的な声表現を含む、エロティックな心理的空間が作り出され、聴者にアプローチする音、愛撫する触覚的な音、愛するヒトの動きをする音など、様々な身体性のある音が表現され、鑑賞者が音のエロスを全身で体感する。

多方面にわたる調査に基づく論考はとくにその例証の数、量において説得力あるものになっている。論文の全体の構成やバランスは整理され、考えぬかれたものであり、作品もその内容に論文での考察が反映され、効果的な空間表現は大変魅力的なものであった。以上の理由から、谷原の論文、作品は学位授与に値すると認め合格とする。